

社会科（地理的分野）学習指導案

日 時 平成28年6月2日（木）公開授業Ⅱ
学 級 岩手大学教育学部附属中学校
1年D組40名
会 場 3B3C教室
授業者 七木田 俊

1 単元名 小単元「南アメリカ州」（中単元「世界の諸地域」の導入単元）

2 単元について

本単元は、世界の諸地域の多様性や地域的特色を扱う大単元「世界の様々な地域」において、「ア 世界の地域構成」、「イ 世界各地の人々の生活と環境」を学んだあとの中単元「ウ 世界の諸地域」の導入にあたる小単元「南アメリカ州」である。

(1) 生徒観

生徒は中学校入学後、地球儀や地図帳を積極的に活用しながら、主に地球や州をマクロに眺め、世界の地域構成、世界各地の人々の生活と環境を学んできた。その過程で、地図帳の統計資料の使い方やさくいんの引き方、地球儀での距離と方位の調べ方や写真資料の読み取り方、雨温図の読み取り方など、地理的技能の習得を目指している。また、「位置」や「分布」、『中学校学習指導要領解説社会編（以下、指導要領解説）』における表現に倣うと、「どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか」といった、「地理的見方の基本」を学んでいる段階である。

地理的分野に関わる学習内容に関して、小中連携の視点から『小学校学習指導要領解説社会編』を確認する。小学校では、3学年において学校周辺および市町村規模の地域、4学年で都道府県規模の地域、5学年では全国規模の地域学習、6学年の「我が国と結びつきの強い国々」の学習においては、他国とのつながりについて学ぶというように、同心円的にその学習対象となる範囲を拡大させている。実質的に、世界規模での自然環境や生活・文化、また6つの州の地誌を学習し、その地域的特色について考察するのは、本中単元「世界の諸地域」が初めてである。そこで、6つの州の学習配列を決める参考とすべく、以下のように事前調査を行った。

- | |
|--|
| <p>○ 世界を6つの州に分けたとき、1番身近に感じられない州はどこですか？</p> <p>1 アフリカ州（27人・67%）</p> <p>2 オセアニア州（11人・28%）</p> <p>3 南アメリカ州（2人・5%）</p> <p>※ ヨーロッパ州、北アメリカ州、アジア州の回答はそれぞれ0人</p> |
|--|

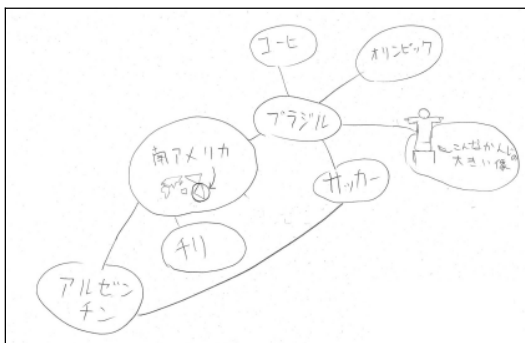
中学校入学後、「世界の地域構成」において、6つの州の位置を理解し、構成する主な国々を概観した状況で得られた上記の結果を踏まえ、配列の組み方を工夫したい（詳細は(2)教材観）。

また、本小単元「南アメリカ州」に関わって、生徒は第5学年内容(1)「ア 世界の主な大陸と海洋、主な国の名称と位置、我が国の位置と領土」において、「世界の主な国を取り上げ、その国の名称と位置を地図帳や地球儀などで調べ、白地図などに書き表」している。例えば東京書籍(2015)『新編新しい社会5上』では、「我が国とそれらの国との位置関係を確認」する際に、南アメリカ州、またその主な国であるブラジルやアルゼンチンの位置を取り扱っている。第6学年内容(3)「ア 我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の様子」では、「つながりが深い国の人々の生活の様子を調べて」いる。同じく『新編新しい社会6下』では、「外国の人々と共に生きていくために」「異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること」から、その手掛かりとして、歴史や文化などで我が国とつながりの深い国であるブラジルを取り上げ、人々の様子をどのように調べまとめたらいいか、日系移民の生活の様子がまとめられた作品を例示している。これらを踏まえ、生徒の南アメリカ州の学習に関するレディネスを確認するため、小学校の学習（内容）に関する事前調査を行った。結果は次頁の通りである。

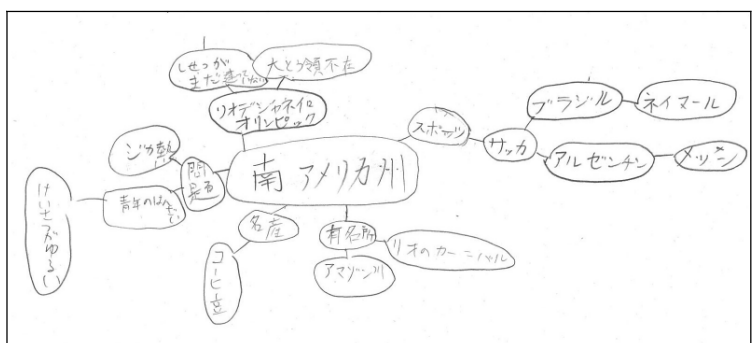
- 南アメリカ州に関して、小学校で学習して現在も覚えていること（人・ものなども含む）をすべて書いてください。
- ・サッカー（が強い・さかん）（17人・43%） ・ブラジル（15人・38%）
 - ・コーヒー（豆生産がさかん）、（リオの）カーニバル（各7人・18%）
 - ・アルゼンチン、南半球（各4人・10%）
 - ・チリ、日本からの移民（日系人）が多い、リオデジャネイロ五輪（各3人・8%）
 - ・日本の裏側、大陸の形（に関する記述）、人口が多い、サッカーW杯（各2人・5%）
 - ・赤道ギニア、北アメリカと同じくらいの面積、さとうきび、熱帯、ケバブ、シュラスコ、
ネイマール、日本との貿易、コルコバードのキリスト像、キリスト教、日本人町
（各1人・各3%）
 - ・なし（13人・33%）

5学年の「主な国」について、「近隣の諸国を含めてユーラシア大陸やその周りに位置する国々の中から10か国程度、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアなどの大陸やその周りに位置する国々の中からそれぞれ2か国程度を選択」としていること、6学年の「我が国とつながりが深い国」について、「教師が三か国程度取り上げ、その中から児童一人一人が自らの興味・関心や問題意識に基づいて一か国を選択」としていることから、個人、各学級・学校において学習対象となった国が多岐に渡ったことが推測される。南アメリカ州に関わって、全員が学習しているのは、南アメリカ州に属する国としてブラジルやアルゼンチン、チリなどの国名と位置程度であることが、上記のような結果につながったと考えられる。

上記の結果を踏まえつつ、南アメリカ州の既存の知識およびイメージがどのように形成されているかを見とるため、コンセプトマップを作成させた。



【図1 生徒が作成したコンセプトマップ①】



【図2 生徒が作成したコンセプトマップ②】

生徒が作成したコンセプトマップは、大きく2つに分けられる。1つは、図1のように、小学校及び中学校入学後の学習による既習事項を中心に描かれているものである。もう1つは、図2のように、時事問題等、生活経験の中で得た事項を盛り込んでいるものである。しかしいずれも、日本との関わりや地域的特色を見とることができるものはほとんどなかった。また、情報量が10を超える生徒はちょうど半数と、基本的な知識量が十分でないことが明らかになった。南アメリカ州が世界の諸地域の導入單元であることも鑑みて、その考察の仕方などが他の州を学習する際の1つの指標となりうるように単元の構成を工夫し、南アメリカ州の地域的特色を豊かにイメージできるような学習を展開したい。

(2) 教材観（学習材観）

① 中単元「世界の諸地域」の配列

指導要領解説によると、中単元「世界の諸地域」は、「世界の各州を対象として、それぞれの州内に暮らす人々の生活にかかわり、かつ我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることを主なねらいと（下線部は授業者）」する。

「世界の諸地域」は、「基礎的・基本的な知識を定着させるという観点」、「汎用性が高いという観点」を鑑みて、「形式地域による地域区分が採用」されている。次頁表1は、指導要領解説および教科書各社による世界の諸地域の学習配列である。

【表1 指導要領解説および教科書各社による世界の諸地域の学習配列】

配列	指導要領解説	A社	B社	C社	D社
1	アジア	アジア	アジア	アジア	アジア
2	ヨーロッパ	ヨーロッパ	ヨーロッパ	ヨーロッパ	アフリカ
3	アフリカ	アフリカ	アフリカ	アフリカ	ヨーロッパ
4	北アメリカ	北アメリカ	北アメリカ	北アメリカ	北アメリカ
5	南アメリカ	南アメリカ	南アメリカ	南アメリカ	南アメリカ
6	オセアニア	オセアニア	オセアニア	オセアニア	オセアニア

D社こそアフリカ→ヨーロッパの配列を採用しているものの、他に差異は見られない。学習配列については、赤坂(2013)が『世界の諸地域』の学習順序は、生徒の興味関心や実態をふまえ、メリハリのある工夫をすること」と指摘する。前次学習指導要領では、「身近な地域」→「都道府県」→「世界の国々」とマイクロからマクロへ拡大していたものが、今次学習指導要領においては、いわゆる「世界地理先習論」にもとづき「世界の国々」→「日本の諸地域」→「身近な地域」と、マクロからマイクロへ焦点化される方向のカリキュラム構成に変更された。この、徐々に生活経験地域へ近付いてくるというカリキュラム構成と、前記の生徒の実態を鑑み、本校では、日本の対蹠点があり、距離的に1番遠い位置にありながら、生徒にとって「身近でない」というとらえが少ない南アメリカ州から、徐々に日本へ近付いていく配列を採用することとする。

② 中単元「世界の諸地域」の主題

世界の諸地域学習では、「様々な面から地域的特色を大観させ」ながら「基礎的・基本的な知識を習得」させ、追究の過程で「それらの知識を活用」し、「生徒の関心と結びつきやすい主題を設定」することが求められている。主題は、「教師によって設定される」が、「我が国との比較や関連を図る視点をもって」設定すること、「州の地域的特色」が明確となり、かつ「我が国の国土の認識を深める上で効果的である」という観点から設定すること」といった留意点が存在し、非常に頭を悩ませるところである。

【表2 教科書各社による世界の諸地域の主題例】

世界の諸地域 (州)	主題例			
	A社	B社	C社	D社
アジア	巨大な人口と急速な経済発展	急速な成長	経済成長による社会の変化	多様性と経済発展
ヨーロッパ	国境をこえた結びつきによる変化	国家間の統合	EU統合による社会の変化	統合を強める国々
アフリカ	人々の生活の変化と自立への課題	農業や鉱業の特定産物へのかたより	主な生産品にたよる経済からの変化	人々の暮らしとその変化
北アメリカ	世界に影響を与える産業と文化	さかんな産業	世界中じゅうに影響をあたえる産業	世界に及ぼす影響力
南アメリカ	進む開発と環境問題	進展する開発	開発・環境問題と人々の生活	開発と環境
オセアニア	多文化社会の形成とアジアとの結びつき	強いアジアとの結びつき	他地域との結びつきの変化	他地域との結びつき

南アメリカ州において「森林破壊と環境保全」を主題例に挙げる指導要領解説では、「なぜアマゾンの森林が減少し、サトウキビ栽培が増加しているのか」という学習課題と、その追究イメージが示されている。しかし、これはあくまで例示であり、「例示と異なる趣旨の主題を設定して指導することができる」こと、「学習内容及び学習過程を設計」するなど、「指導上の工夫」が求められている。

以上を踏まえ、本校では、世界の諸地域学習における配列ならびに主題を、次頁表3のように設定する。

【表3 世界の諸地域学習における本校の学習配列と主題】

配列	世界の諸地域	本校の主題	指導要領解説による主題例
1	南アメリカ	内陸部の農業開発と 沿岸部の大都市への人口集中	森林破壊と環境保全
2	北アメリカ	世界に及ぼす影響力	大規模農業と工業の発展
3	アフリカ	人々の生活の変化と自立への課題	モノカルチャー経済下の人々の生活
4	ヨーロッパ	結びついた国々の光と影	EUの発展と地域間格差
5	オセアニア	アジアとの強い結び付き	アジア諸国との結び付き
6	アジア	巨大な人口と急速な経済発展	人口急増と多様な民族・文化

③ (南アメリカ州の) 主題設定の理由

南アメリカ州は人口約4億人、面積約1,800万km²で、12か国から構成される。人口と面積のおよそ半分は、BRICSの1つに数えられるブラジルが有し、ブラジルは南アメリカ州の中心国と称される。

南アメリカ州には、地主が広大な土地を所有する、大土地所有制がスペインやポルトガルからもちこまれた。この大土地所有制は、貧富の格差の大きい社会を生み出した。この歴史に関わり、南アメリカ州の地域的特色として、大きく2点を挙げる。

1点目は、内陸部の農業開発についてである。南アメリカ州にはブラジルのコーヒー、エクアドルのバナナに代表されるように、特定産品に依存したモノカルチャー経済の国が多く、その脱却を図り、経済基盤を安定させることが課題とされてきた。それは、前述のように、少数のヨーロッパ人の農園主が広大な土地を所有し、多数の農業従事者が低い賃金で雇われるなど、農園主を頂点とする社会的・経済的な階層が存在したことに起因する。それが20世紀後半以降、例えばブラジルやアルゼンチンは、大豆の栽培面積が急増し、国際市場で大きな割合を占めるようになった（これは、中国をはじめとする国々で食生活が変化し、大豆の需要が増えたことが大きく影響していると言われる）。ブラジルを例にとると、その背景として、大きく2つを指摘できる。1つ目は、1974年、当時の田中角栄首相がブラジルを訪問した際に、セラードの開発支援を表明したことに端を発し、日本が全面的に資金協力や技術協力を行ったことである。その結果、ブラジルの内陸部に位置し、農業に適さないと言われていた広大な熱帯サバ(ン)ナ地域であるセラードは、一大穀倉地帯に変貌した。特に大豆の生産量は、43万トン(1975年)から、4,000万トン(2010年)と飛躍的に増加。現在では、長らくブラジルの輸出品の1位を占めていたコーヒー豆を上回り、鉄鉱石、原油、機械類に次ぐ輸出品の柱になるまでに成長した。セラードで生産される農作物は大豆にとどまらず、トウモロコシ、野菜、果物、畜産物、綿花などに広がり、モノカルチャー経済から(農業の)多角化が実現した好例に挙げられる。2つ目は、地主が農業経営の近代化・企業化を図ったことである。いわゆる穀物メジャーをはじめとした農業関連の大企業によって、大規模な林野開発、農薬や化学肥料の使用等が推奨され、より利潤が追求されることとなり、利益率が高い農産物の生産を求めることになった。一方で、この企業的な農業の展開に代表される農業経営の近代化・企業化は、環境問題を引き起こす大きな要因となっている。

2点目は、沿岸部の大都市への人口集中である。1点目同様、その背景として大きく2つを指摘できる。1つ目は、大土地所有制のもと、昔から低賃金で雇われ、住み込みで生活してきた労働者が、農業経営の近代化・企業化により労働力を必要としなくなった農園で職を失い、大都市へ流入してきたことである。これにより、ブラジルのファベラに代表されるように、スラム街が多数形成され、治安や衛生面の悪化といった都市問題が顕在化することとなった。貧富の格差は、南米諸国が抱える共通の問題となっている。2つ目は、近代工業が大都市で急速に発展したことである。花巻空港をはじめとする日本国内の地方空港の離発着増便を可能にした一因とも言われる、エンブラエル社の(小型)旅客機製造などに代表されるように、サンパウロ、リオデジャネイロの2大都市圏を中心とした沿岸部の工業化は目覚ましいものがある。これに起因する内陸部と沿岸部の著しい経済格差も、問題の1つとして挙げられる。

上記のように、「内陸部の農業開発」と「沿岸部の大都市への人口集中」を追究させることで(一般的共通性と地方的特殊性といった)南アメリカ州の地域的特色をとらえることができると考え、南アメリカ州の学習における主題を「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」と設定した。

(3) 学びの本質に迫る指導について

本校社会科では、批判的思考力を「見かけに惑わされず、多面的・多角的に事象をとらえて、本質を見抜く力」とし、社会参画の基盤となる力と位置付け、「批判的思考力を高め、社会参画の意識をもつ」ことが、社会科における学びの本質であるととらえている。そのうえで、以下の3点に着目して指導にあたることで、学びの本質に迫る（詳細は岩手大学教育学部附属中学校(2016)『平成28年度 岩手大学教育学部附属中学校研究紀要』pp. 35-48参照）。

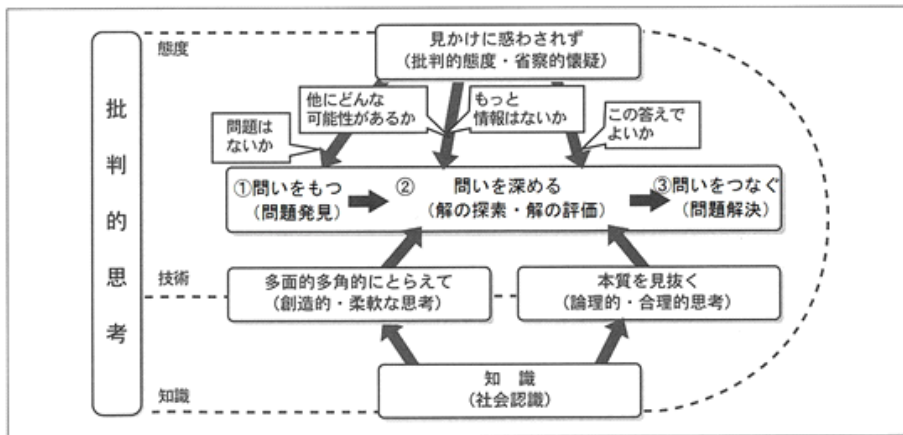
【資料1 学びの本質に迫る指導の重点】

- 視点1 批判的思考力を高める学習プロセス
- 視点2 「見方や考え方」の深まりの自覚化
- 視点3 追究意欲を喚起する教材発掘・開発

このうち、本単元では特に、「視点1 批判的思考力を高める学習プロセス」と「視点3 追究意欲を喚起する教材発掘・開発」に重点を置く。

① 視点1 批判的思考力を高める学習プロセス

見かけに惑わされず、多面的・多角的に事象をとらえて本質を見抜く批判的思考のイメージは下図の通りである。また、具体的な学習活動を表4のように位置付けている。



【図3 批判的思考のプロセス】

【表4 批判的思考力を高める具体的な学習活動】

① 問いをもつ	② 問いを深める	③ 問いをつなぐ
ア 社会的事象を的確にとらえる。 イ 社会的事象相互の関係構造を把握する。 ウ 課題を発見・把握する。 エ 解決の見通しを立てる。	ア 資料を収集し、読み取り、読み取った情報を記述する。 イ 社会的事象の意義や意味を解釈する。 ウ 社会的事象間の関連を説明する。 エ 自分の意見をまとめて論述する。	ア 全体構造を把握する。 イ 学習成果が転移・応用可能かどうか考える。 ウ 実社会とのかかわりを見いだす。

本単元では、主に自然環境や歴史・文化を中心に南アメリカ州を大観する1・2時間目、そして南アメリカ州の中心国であるブラジルの首都移転について扱う3時間目までを、「① 問いをもつ」段階ととらえ、「ア 社会的事象を的確にとらえる」こと、「ウ 課題を発見・把握する」ことを重点に問いをもたせたい。特に3時間目では、首都人口の増加の理由を探るなかで、首都が移転したことに気付かせ、さらにその理由としての「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」を本単元の主題に設定する。コーヒー豆の輸出に依存したモノカルチャー経済から脱却しつつも、新たに熱帯林の破壊などの環境問題に直面していることを学習する4時間目、花巻空港を離発着する小型旅客機生産など、豊富な資源をもとに沿岸部の大都市周辺で進む工業化と、一方で、ブラジリアを中心とした内陸部への人口移動は一定の効果を生みながらも、沿岸部の大都市への人口集中が止まらず、都市問題が新たに発生し、改善の見通しが難しい状況を学習する5時間目を「② 問いを深める」段階ととらえる。ここでは、「ア 資料を収集し、読み取り、読み取った情報を記述する」こと、「ウ 社会的事象間の関連を説明する」ことを重点に問いを深めさせたい。そして、1・2時間目で大観した南アメリカ州の自然環境、歴史・文化、ブラジリアの人口増加の理由を追究し主題を設定した3時間目、主題を追究した4・5時間目の学習の成果を白地図にまとめさせる6時間目を「③ 問いをつなぐ」段階ととらえる。ここでは、1つの事象を追究することで州の地域的特色が理解できたことや、南アメリカ州の学習の流れを想起させ、次単元への見通しをもたせることで、「イ 学習成果が転移・応用可能かどうか考える」ことを重点に問いをつなげさせたい。

② 視点3 追究意欲を喚起する教材発掘・開発

学習者である生徒にとって、南アメリカ州は、アフリカ州やオセアニア州よりは身近に感じているが、具体的なイメージを形成できるだけの知識を持ち得ていないことは、事前調査で明らかになった通りである (pp. 1-2参照)。このことから、本小単元「南アメリカ州」においては、本校社会科「社会参画を志向する段階」に基づき、社会認識を深める (=事象との距離を縮める)、社会参画を志向する第1段階をねらいとする。

【資料2 社会参画を志向する段階】

第1段階：社会認識を深める (=事象との距離を縮める)
第2段階：意思決定する (=事象に対する考えをもつ)
第3段階：社会参加、提案を行う (=事象に直接的に関わる)

生徒の社会参画意識を醸成するには、実社会そのものや実社会の社会的事象に関心を持たせることが必要である。そのためには、社会科が内容教科であることも鑑み、(生徒にとって未知あるいは予想に反する結果になるような)「魅力的な社会的事象の教材化」、(マクロな社会的事象の理解の深化につながる、人の営みが見えるような)「ミクロな社会的事象の教材化」が不可欠であると考えられる。本小単元「南アメリカ州」では、生徒にとって未知あるいは予想に反する結果になるとと思われる、ブラジルの首都移転を教材化する。

2000年代に入って下火になったものの、日本でもこれまで、首都機能の移転についてさかんに議論されてきた(政府が募集した「21世紀の日本の国土と国民生活の未来像」論文で、早稲田大「21世紀の日本研究会」が1971年に提起した現盛岡市玉山区への首都機能移転を推奨する「北上京遷都論」と、「21世紀研究会-鈴木雅次グループ・中都市計画班」による「百万都市盛岡計画」が、最高賞の政府総合賞(3編)に選ばれるなど、本県にも関わりが深い)。国土交通省のHPには、「海外の代表的な首都機能移転」として、具体例が示されている(首都機能とともに首都そのものを移転した例としてドイツ、ブラジル、オーストラリア、パキスタン・イスラム共和国が、首都機能のみ移転した例としてマレーシア、大韓民国が掲載されている)。生徒にとって、これまでの学習や生活経験から、首都(機能)が移転する可能性がある、また移転した例がある、その議論が日本でもあった(ある)ということは、未知もしくは予想に反する事実であると考えられる。

1500年に現在のブラジルが発見され、最初に首都となったのは、奴隷貿易の中心地となった港湾都市サルヴァドールである。それが1750年、東北部沿岸に置かれた首都(ポルトガル総督府)の移転が、ポルトガルによって計画された。これは主として、スペインをはじめとした列強の進出への懸念という理由からであり、主に地理学的見地からその最適地とされたのが、現在のブラジリア付近である、ブラジル高原ゴイアス州の一角だった。この遷都は実現せず、1763年、当時経済の新たな拠点となっていたリオデジャネイロへ首都が移転した。それ以降、遷都の議論は尽きることがなく、1822年に独立以降、さらにその動きは加速した。そして第二次大戦後の1946年、改正憲法において首都移転は再び規定され、1955年、新首都の最終的な位置が現在のブラジリア付近に決定し、翌年就任したクビチェック大統領の「50年の進歩を5年で」という積極的な推進策の下で、新首都の名称がブラジリアに決定した。

2010年当時、駐日ブラジル連邦共和国大使館経済部長であったエドゥアルド・テイシェイラ・ソウザは、首都移転50周年を迎えた際に、その目的として以下の3点を指摘した。

1点目は、「ブラジルのアイデンティティを確立すること」である。南條(1998)が指摘するように、ポルトガルの影響を強く受けるリオデジャネイロからの首都機能移転は「一貫してブラジルの願い」であったとされる。

2点目は、「内陸部への人口の分散」である。沿岸部に人口が集中しているのに対し、人口がまばらだった内陸部への人口分散は、地理学的な戦略上必要不可欠だったとされる。

3点目は、「内陸部の開発」である。ブラジルのサバンナと評されるセラードは、ブラジルの総面積の2割以上を占める。肥沃でありながらも土地改良の必要があったこのセラード開発には、前述のように日本が大きな役割を果たし、セラードで生産される大豆は、現在ブラジルの輸出を支える基幹産業にまで発展したことは前述の通りである。

このように、ブラジルの首都移転の理由や背景を追究させることは、結果として、教材観で述べた「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」を追究させることにつながり、ひいては南アメリカ州の地域的特色を考察させることになる。また、南アメリカ州の面積と人口のおよそ半分を占めるブラジルの首都移転を、「州内の特色ある地理的事象」と考えたとき、首都移転の理由を追究させることを通して主題を設定することは、指導要領解説の「州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させること」というねらいに合致するといえる。

3 単元の指導目標及び評価規準

(1) 指導目標

南アメリカ州の自然環境，歴史や文化などを大観させた上で，「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」を主題に設定し，それを追究する過程を通して，南アメリカ州の地域的特色について多面的・多角的に考察させるとともに，考察した過程や結果を適切に表現させる。

(2) 評価規準

	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
観 点	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色に対して関心を持ち，学習課題の解決に向けて意欲的に考えようとしている。	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色を多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。	南アメリカ州に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択し，人々の生活の様子や地域的特色について読み取ったりまとめたりしている。	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色を理解し，その知識を身に付けている。

4 単元の指導計画及び評価計画 (単元：「南アメリカ州」6時間)

時	指導内容	評 価	評価場面
1	1. 南アメリカ州の自然環境 (=地域的特色の大観①)		
	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州に関して知っていることを想起させ，記入させる。 南アメリカ州を構成する国名と位置，気候帯や地形などの自然環境を調べさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州を構成する国名と位置，気候帯や自然環境などに関する資料から有用な情報を適切に選択し，地域的特色について読み取ったりまとめたりしている。 <p style="text-align: center;">【技能】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業 (ワークシート)
2	2. 南アメリカ州の歴史・文化 (=地域的特色の大観②)		
	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州に栄えた文明やヨーロッパの人々の進出，日本をはじめ多くの国からの移民を受け入れた歴史を概観させる。 南アメリカ州の人口のおよそ半分がブラジルに集中していることを理解させる。 前時学んだ広大な熱帯林や世界最長の山脈などの恵まれた自然環境が，歴史や文化に大きな影響を与えていることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先住民，植民地，ヨーロッパ州，日本という語句を用いて，南アメリカ州の成り立ちと歴史についてまとめている。 <p style="text-align: center;">【知識・理解】 【思考・判断・表現】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート
3 本 時	3. ブラジルの首都移転 (=地域的特色の大観③・主題の設定)		
	<ul style="list-style-type: none"> (南アメリカ州の中心国ブラジルの) 首都ブラジリアの人口増加が驚異的であることに気付かせ，問いをもたせる。 ブラジルの首都が移転したこと，その背景には，内陸部の農業開発，沿岸部の大都市に集中する人口の内陸部への分散などの意図があったことを理解させる。 次時から，内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中について追究活動を行うことを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ブラジリアの人口が急激に増加したのは，ブラジルのアイデンティティの確立，沿岸部に集中する人口の内陸部への分散，内陸部の農業開発という意図のもと行われた首都の移転が理由であることをまとめている。 <p style="text-align: center;">【知識・理解】 【思考・判断・表現】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート

4	<p>4. 内陸部の農業開発～モノカルチャー経済からの脱却と環境問題～（＝主題の追究①）</p> <p>・ブラジルは長い間、コーヒー豆の輸出に依存したモノカルチャー経済の国だったことを、地図資料やグラフから読み取らせる。</p> <p>・日本の人や技術の提供によるセラード開発などもあり、農業の多角化が進んだこと、さとうきびはバイオ燃料の原料となり、ブラジルではその開発が進んでいることを理解させる。</p> <p>・アマゾン川流域を中心に、熱帯林の破壊が問題化していること、そこにバイオ燃料開発のためのさとうきび栽培が関与していることを理解させる。</p>	<p>・モノカルチャー経済の国だったブラジルは、日本の支援もあり農業の多角化に成功したこと、近年では開発が環境や人々の生活に大きな影響を与えていることを理解し、まとめている。</p> <p>【知識・理解】 【思考・判断・表現】</p>	<p>・作業 ・ワークシート</p>
5	<p>5. 沿岸部の発展する大都市～発展する工業と人口集中の問題～（＝主題の追究②）</p> <p>・豊富な資源をもとに、沿岸部の大都市周辺で工業化が進んでいることを、輸出品の変化に関するグラフや花巻空港を離発着する航空機の写真資料から読み取らせる。</p> <p>・都市人口の割合が増加することにより、環境問題や衛生問題が発生していることを資料から読み取らせる。</p>	<p>・資料から、沿岸部を中心とした工業化の進展、都市人口割合の増加に伴う諸問題の発生について読み取り、人々の生活の変化についてまとめている。</p> <p>【技能】</p>	<p>・作業 ・ワークシート</p>
6	<p>6. 南アメリカ州の特色（＝単元の振り返り）</p> <p>・主題を追究した前2時間を中心に、既習事項をもとに南アメリカ州の特色を白地図等にまとめさせる。（※必要に応じて宿題を課す。）</p> <p>・コンセプトマップを再度作成させ、学習前に作成したものとの変化を読み取らせる。</p> <p>・主題を設定し、地域の特色を追究した5時間について、自身の見方や考え方の変容について振り返らせる。</p> <p>・盛岡市に在住するブラジル人の、日本と比較したブラジル及び南アメリカ州の特色についての話から、他地域の学習への意欲を喚起する。</p>	<p>・既習事項をもとに、南アメリカ州の地域的特色をまとめようとしている。</p> <p>【関心・意欲・態度】</p> <p>・南アメリカ州の特色について考察した過程や結果を、自然環境、歴史と文化、農業、工業、人口という視点から地図を活用してまとめている。</p> <p>【技能】</p>	<p>・挙手、発言 ・作業 ・ワークシート</p>

5 本時について

(1) 主題 ブラジルの首都移転（地域的特色の大観③・主題の設定）

(2) 指導目標

- ① ブラジリアの人口増加の理由について、複数資料を関連付けて考察させる。
- ② ブラジリアの人口増加が急激に増加したのは、3つの背景をもとにした首都移転であることをまとめさせる。

(3) 評価規準

ブラジリアの人口が急激に増加したのは、ブラジルのアイデンティティの確立、沿岸部に集中する人口の分散、内陸部の農業開発という意図のもと行われた首都の移転が理由であることをまとめている。

【知識・理解】 【思考・判断・表現】

(4) 指導の構想

本時は、南アメリカ州について、構成する国々の名称と位置、多様な自然環境について大観した1時間目、歴史や文化などを大観した2時間目に続く、6時間抜きの単元3時間目にあたる。

① 視点1 批判的思考力を高める学習プロセス

前述の通り、本単元では「学びの本質に迫る指導の視点」のうち、視点1と視点3を重点に指導にあたる。このうち、「視点1 批判的思考力を高める学習プロセス」については、単元全体を通しての学習プロセスがメインではあるが、本時1単位時間の中でも意識した授業を展開したい。

導入では、およそ60年間でブラジルとリオデジャネイロの人口が3～4倍に増加したことを取り上げる。その際、ブラジルの首都はどこか尋ねたうえで、地図帳で確認させ、ブラジルの首都は（内陸部に位置する）ブラジリアであることを押さえさせたい。そのうえで、首都ブラジリアの人口増加が驚異的であることに気付かせる。これは同時に「なぜブラジリアの人口は急激に増加したのか？」と「ウ 課題を発見・把握する」ことになり、「① 問いをもつ」ことになる。生徒の思考に沿い、実感を伴う学習課題を設定したい。

課題に対する初発の予想の根拠は、主に生活経験である（実は既習事項と関連している部分もある）。この時点では、多様な考えが出されることも予想される。予想を検証するための第1段階として、導入でリオデジャネイロとブラジリアの人口を取り扱った流れから、「ブラジルの他都市の人口はどうなっているか」、また、ブラジリアは内陸部にある首都ということしか情報がないことから、「ブラジリアの街の様子は（他国の首都と比較して）どうなっているのか」と、生徒の思考を保障しつつ、こちらから資料を提示したい。資料を個人で読み取らせ、それぞれ分かることを挙げさせたい。ここではここから、ブラジリアの人口増加の理由として言えることはないか？と問う。岩手県教育委員会事務局学校教育室(2016)は『学校教育指導指針』(以下、県教委指針)において、中学校社会科の指導の要点として「複数の資料から情報を取り出し、社会的事象の意味や意義を解釈したり、事象の特色や事象間の関連を説明したり、自分の考えを論述したりできるようにする」ことを挙げる。2つの資料からわかったことをもとに、人口増加の理由を考察する一連の流れはまさにこれにあたる。また、これは「イ 社会的事象の意義や意味を解釈する」こと、「ウ 社会的事象間の関連を説明する」ことであり、「② 問いを深める」学習活動であると考えられる。さらに、新たに挙げられた人口増加の理由について、ペアもしくは小グループで吟味させることで、さらに「問いを深める」ことをねらいたい。「新しい道路が通ったことで内陸部に人口が流入した(から)」といった考えが出されることが予想されるが、ここで、「(1950年からここまで)新しい道路が増えたという予想を検証するにはどのような資料が必要か」と問う。必要に応じて、手持ちの地図帳で現在の内陸部と沿岸部を結ぶ道路網に着目させたい。1950年当時の地図が検証資料として最適であることに気付かせたい。新旧南アメリカ州の地図を比較させ、1950年当時の首都はリオデジャネイロであること、1950年にブラジリアは存在しないこと、また当時は道路網が発達していないこと等に気付かせたい（これは県教委指針による地理的分野の重点「地図を有効に活用して事象を読み取ったり解釈したりする学習」に該当する）。ブラジリア建設当時のパイロット・プラン（＝都市の設計図）や、航空写真、当時のブラジリア国会付近の様子から、ここでまず、課題に対する答えとして「首都がブラジリアに移転したから」と決着させたい。端的にはこれが課題に対する答えとなるが、生徒の思考に寄り添った際、ここで更なる疑問が生まれていることが予想される。「なぜ首都が移転したのか?」「なぜブラジリアだったのか?」この疑問に関しては、首都移転の理由である・ブラジルのアイデンティティの確立・内陸部の農業開発・沿岸部に集中する人口の分散について、既習事項（＝ポルトガルによるブラジル支配、ブラジル国土の約2割を占めるセラード）や本時の資料（10大都市は沿岸部に分布）と絡めながら理解させたい。

終末では、本時のまとめを記述させることで、「ア 全体構造を把握する」こと、主題を確認し、次時以降の学習の見通しをもたせることで「③ 問いをつなぐ」ことをねらいたい。

② 視点3 追究意欲を喚起する教材発掘・開発

「(2)教材観」の「③(南アメリカ州の)主題設定の理由」の通り、本小単元(南アメリカ州)の地域的特色は「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」を追究することで明らかになると考える。「ブラジリアの人口急増」、またその理由となる「ブラジリアへの首都移転」は、「(生徒にとって未知あるいは予想に反する結果になるような)魅力的な社会的事象」と考えられる。さらに、「50年の進歩を5年で」というスローガンのもと遷都計画を実現した当時のクビシェッキ大統領が、・ブラジルのアイデンティティの確立・内陸部の農業開発・沿岸部に集中する人口の分散という理由から、ブラジリアへの首都移転を実現したことからも、主題設定へとつながる格好の事象であると考え、これを教材化した。

(5) 本時の展開

段階	学習活動及び学習内容	時間 (分)	■学びの本質とのかかわり
導入	1 前時（まで）の確認をする。 ・南アメリカ州の人口のおよそ半分がブラジル 2 ブラジルの首都を確認する。 ※地図帳で、ブラジルの首都が内陸部のブラジリアであることをつかませる。 3 ブラジリアの人口増加率を他都市と比較する。 ○ 資料1 ブラジリアの人口増加 → ・ブラジリアの人口増加が驚異的だ。 ・なぜブラジリアだけがこんなに急増しているの？ 4 学習課題を設定する。	5分	■視点1①ア 課題を発見・把握する ・他都市と比較させることで、ブラジリアの驚異的な人口増加に気付かせ、そこに「なぜ？」という問いをもたせたい。
なぜブラジリアは急激に人口が増加したのだろうか？			
展開	5 学習課題に対する自分の考え（予想）を記入する。 ・他地域からの移民を受け入れるきまりをつくったから。 ・ブラジリアに、何か便利なものがつくられたから。 6 資料の情報を読み取る。 ○ 資料2 ブラジルの10大都市の分布 → ・ブラジルの大都市の多くは沿岸部に集中している。 ・ブラジリアは内陸部にある。 ○ 資料3 南アメリカ州の首都の写真 → ・街の様子がブラジリアだけ違う。 ・他都市に比べて歴史が感じられない。 7 資料2・3をもとに、人口増加の理由を話し合う。 ・内陸部に新しく町がつけられたのではないか。 ・内陸部に道路が通ったことで、便利になったのではないか。 8 首都が移転したことを確かめる。 ○ 資料4 新旧南アメリカ州の地図 → ・リオデジャネイロから首都が移転している。 ○ 資料5 ブラジリアの航空写真 → ・街並みが飛行機の形をしている。 ・明らかに計画的につくられたようだ。 9 資料や既習事項から、首都機能移転の理由を考察する。 ① ブラジルらしさの確立（ポルトガルの植民地：第2時） ② 内陸部の農業開発（国土の2割がセラード：第1時） ③ 沿岸部に集中する人口分散（10大都市：資料2）	35分	■視点3① 魅力的な社会的事象の教材化 ・ブラジリアが55年間で60倍以上も人口が増加したのは、首都が移転したことが理由だったという、生徒にとって未知の社会的事象を取り扱う。 ■視点1②ウ 社会的事象間の関連を説明する ・複数の資料を関連付けて人口増加の理由を考察させること、さらには「なぜ首都を移転したのか？」「なぜ移転先がブラジリアだったのか」と思考させることで、問いを深めさせる。 ■視点3② ミクロな社会的事象の教材化 ・ブラジリアの人口増加の理由を考察することは、ひいては「内陸部の農業開発と沿岸部の大都市への人口集中」という、南アメリカの地域的特色（＝マクロな社会的事象）の理解の深化につながることになる。
終末	10 学習課題に対するまとめを書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ブラジリアの人口が急激に増加したのは、ブラジルらしさを確立するため、内陸部の農業を開発するため、沿岸部に集中する人口を内陸部へ分散するために、首都がリオデジャネイロからブラジリアに移転されたことによるものである。 </div> 11 本時の振り返りをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 授業前は、南アメリカ州の特色は分からなかったが、ブラジルの首都であるブラジリアの人口増加の理由を考えることで、南アメリカ州の特色が見えてきた気がする。1つのことを追究することを大事にしたいし、次の時間から、内陸部の開発や沿岸部の大都市がどうなったのか調べてみたい。 </div>	10分	■視点2② 学習後の見方や考え方の変容に気付かせる振り返り ・授業前・後、今後という視点から記述させること、主に人口増加の理由を探った本時の学習で分かったことという2点に留意して記述させることで、見方や考え方の変容に気付かせたい。

6 引用・参考文献

【引用文献】

- 赤坂寅夫(2013)『「世界の諸地域」指導の秘訣』帝国書院
- エドゥアルド・テイシェイラ・ソウザ(2010)「首都ブラジリアの過去, 現在, 未来～首都移転50周年を迎えて」国土交通省
- 岩手県教育委員会事務局学校教育室(2016)『平成28年度 学校教育指導指針』p. 17
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説社会編』pp. 20-21, pp. 31-35
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説社会編』pp. 51-55, pp. 94-99
- 南條洋雄(1998)「ブラジリア…約束された首都の物語」, 株式会社大林組『季刊大林 NO. 44』pp. 10-13

【参考文献】

- 堀坂浩太郎(2012)『ブラジル 飛躍の軌跡』岩波新書
- 宮治誠(2015)『ブラジル この興味あふれる国』文芸社
- 中條暁仁・岩本知之・早馬忠広(2014)「中学校社会科における動態地誌的学習の特質と課題」, 静岡大学教育学部『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇45』pp. 71-81
- 中岡義介・川西尋子(2014)『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』鹿島出版会
- 仁平尊明監修(2012)『世界の国々7 南アメリカ州』帝国書院
- 近田亮平編(2013)『躍動するブラジル—新しい変容と挑戦—』アジア経済研究所